五家荘の怨みから学ぶ

９２３年に左座（ぞうざ）太郎が小原奥に住むようになってから１５０４年まで２９代まで続き、３０代目の左座惟致（これち？）は、仁田尾を支配するのに便利な古屋敷（今の朴の木の東側）に家を移し、小原・奥・樽木・朴の木・攻・七人塚・勝負谷・稲葉坊・西の岩・中材・竜の首・東平・福根・黒原・赤石・二本杉・麦石・高生・下屋敷を広く治めていました。その上に阿蘇大宮司という名の殿様が、仁田尾を含めた五家荘全体を広く支配していました。

ある日、五家荘の「葉木」に住む杉内左衛門という武士が、罪もない百姓を切り捨てるという事件が起きました。そのとき五家荘を支配していた殿様の阿蘇大宮司は、そのことを聞いて大変激怒しました。五家荘の樅木・久連子・椎原・葉木・仁田尾の役人とその家族２０人を樅木の奥地に呼び出し、何ということか全員に責任を取らせる連帯責任にして、罰として全員を処刑つまり殺すように命令したのです。その命令により途中逃げ出した２人を除いて全員が殺されてしまいました。その時、この事件に全く関係のない仁田尾地域の３０代目の左座惟致と、その息子で１８才の左座真長までもが殺されてしまったのです。葉木地域の杉内左衛門一人のため、その罰が何の関係もない仁田尾も関係したかのように取られて、当主である左座親子が殺されてしまったことは仁田尾の人たちに葉木への怒りを爆発させたのです。それからというもの事件を起こした武士が住んでいた葉木と、事件に何の関係もないの殺されてしまった仁田尾の間では、いつも争いが絶えませんでした。そのことを今、仁田尾に住んでいる年配の方に聞いてみると「葉木と仁田尾は、昔からとても仲が悪かったですね。私たちはその原因は知りませんが、子どもの頃から葉木の方を向いて寝るなとか、男の人たちは葉木の方を向いて小便もするなというような言い伝えが、ずっと昔からありました。」と答えてくれました。かなり昔の室町時代に起きた一つの事件が、親より子へ、子から孫へとその恨みが何百年も引き継がれてきたようです。

このことから分かるように、昔からたった一人が引き起こした事件であっても、その人が生まれ育った地域全体の責任にされ、地域と地域の争い・恨みが引き継がれて、その後もずっとトラブルを引き起こすことが多かったようです。幸い今ではそのようなことは無くなったようですが、万一あなたが事件を引き起こして人に迷惑を掛けるようなことをしまったとしたら、その地域全員が、その罰を受けることがあることを、しっかり頭に入れておく必要があります。このお話は、そのことを私たちに教えてくれています。

八代市立泉第八小学校長　米多　　等